

令和6年度 第76回 卒業式 式辞

本日ここに、PTA会長 小関邦吉様、駒草同窓会会長 片桐道子様をはじめ、PTAや同窓会そして富澤学園関係の皆様をご来賓に迎え、第76回東北文教大学山形城北高等学校卒業証書授与式をこのように盛大に挙げていきますこと、この上もない喜びであり、卒業生とともに厚く御礼申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与しました341名の皆さん、ご卒業おめでとう。振り返ればあつという間の三年間だったと思われませんが、青年期という多感な時期の中において、楽しいながらも、不安と葛藤の連続だったに違いありません。物事を様々な角度から、そして他者の視点で見ることができるようになるこの時期、「本当の自分とは何か」「将来自分は何をすべきか」など、自己を社会の中に位置づけながら、日々自我の確立を目指してきました。しかしながら、他者の視点で自分を見るときは、言い換えれば、自分の弱点や限界をも知ることになり、自己肯定感が一気に崩れるのもこの時期で、それが不安や葛藤の原因でもあったわけです。

それでも今ここに、君たちが卒業を迎えることができたのは、喜びも苦しみも分かち合った友人、失敗を恐れず挑戦することの大切さを教えてくれた先生、そして苦しみの中には必ず光があると励まし続けてくれた家族、みんなが君たちを支えてくれたからです。

やり残したことはないですか

親友と語り合いましたか

燃えるような恋はしましたか

一生忘れないような出来事に出会えましたか

ご承知のように、これは城北祭の初日のフィナーレで歌った『オワりはじまり』の一節です。今年の3年生は野球部が甲子園の県予選で初めて決勝まで進み、男子バレーボール部は10年ぶりに春高バレーに出場するなど大活躍をしてくださいました。一方で、病気のため長期にわたり療養せざるを得なかった人や障害を抱えながらも日々努力し続けた人、アルバイトで家計を助けながら今日を迎えた人もおり、一人ひとりが本校にとってはかけがえのない存在でした。3年前に親元を離れて高校生活を送る決断をした人もいます。家族の有難みを人一倍感じたことでしょう。ここにいる皆さんが、3年間でこんなにも大きく成長した姿を見るにつけ、多様な人々とのかかわりや様々な体験を通して成長を促す教育こそが、本校のあるべき姿だと改めて確信しているところです。

そして、保護者の皆様、本日はお子様の立派に成長された晴れ姿に、感慨ひとしおのことと拝察いたします。思い起こせば、世界的な広がりをみせた新型コロナウイルス感染症は、高校2年生の5月から5類へ移行し、ほぼ支障なく学校生活を送れるようになりました。しかし、子どもは時間とともに話をしなくなったり、反抗したりと、子育ての難しさに戸惑う日もあったのではないのでしょうか。これこそが自我の目覚め。思春期は子どもにとって、自分自身になるための大切な時期であり、親離れ・子離れの最終局面だったわけです。そんな中にあっても、優しい眼差しを持って子どもの喜びや悩みに共感し、そして本校教育に対しましても、温かいご支援とご協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

さて、卒業生の皆さんが本校で過ごしたこの3年を振り返ると、安倍元総理が銃弾に倒れ、知床では観光船が沈没し多くの尊い命が失われました。政治においては、資金パーティーに関する裏金問題が発覚しましたが、国民よりも自分の方が大事という政治家が多いことに辟易します。また、本県でも豪雨による災害がありましたが、能登の大地震など自然災害の絶えない3年間でもありました。世界に目をやれば、ロシアによるウクライナ侵攻やイスラエル・ハマスの間の戦争など、争うことはヒトの本能なのかと思ってしまうほど、愛や平和という言葉の無力さも思い知らされました。

とは言え、教育はヒトを人間にする営みであり、それは言葉によって行われるものですから、私が皆さんに伝える最後の話は「言葉の授業」にしようと思います。昨年11月13日、日本を代表する詩人の谷川俊太郎さんが92歳でその生涯を閉じました。

生きるということ／今生きるということ／それはのどがかわくということ／木もれ陽がまぶしいということ／
ふっと或るメロディを思い出すということ／くしゃみすること／あなたと手をつなぐこと

で始まる『生きる』と題する詩は、教科書にも掲載され、合唱曲にもなった谷川さんの代表作です。鋭い感性と柔らかな表現で紡ぎ出される言葉は、まるで生き物のような躍動感を持ちます。

もう40数年前のことになりますが、私の二十歳の誕生日に、友人が上下巻重ねると10センチにもなる『谷川俊太郎詩集』をプレゼントしてくれました。私が、谷川俊太郎が好きだと伝えたからなのか、それとも友人が読ませたかったからなのか、その記憶はもう定かでないのですが、当時テレビのない生活をしていた私は、一編一編を繰り返し、繰り返し読んでいました。

ひろげたままじゃ持ちにくいから／きみはそれをまるめてしまう／まるめただけじゃつまらないから／きみはそれをのぞいてみる／小さな丸い穴のおこう／笑っているいじめっ子／知らんかおの女の子／光っている先生のはげあたま／まわっている春の太陽／そしてそれらのもっとおこう／きみは見る／星雲のようにこんとんとして／しかもまぶしいもの／教科書には決してのってはず／蛍の光で照らしても／窓の雪ですかしてみても／正体をあらわさない／そのくせきみをどこまでも／いざなうもの／卒業証書の望遠鏡でのぞく／きみの未来（詩集『どきん』より）

先ほどクラス総代の方々に卒業証書を手渡しましたが、それは駒草同窓会から贈られたホルダーに収められています。昔はホルダーなどなく、筒に入れて保管したわけですが、『卒業式』と題するこの詩は、丸めた卒業証書的一方から覗いたときに見えた教室の風景とともに、混沌としながらもまぶしい未来が見えるという、何とも卒業式にふさわしい希望あふれる詩です。これを書いたのは谷川さんが18歳の時で、法政大学総長の息子でありながら大学へは進学せず、高校卒業と同時に詩人として生きる道を選択した頃の作品です。

本日高校を卒業する皆さんは、卒業証書で作る望遠鏡の先に見るのは、いったいどんな未来でしょうか。この3年間を振り返っただけでも、変化が激しく、未来予測など困難な時代を生きているわけですが、そんな時代であっても大切にしてほしいのは、校是である《敬愛信》の精神です。他者を敬い、人を愛し、自らを信じて生きることです。

そして、あらゆる選択は人生を決定するなどということはなく、単なる通過点に過ぎません。だからこそ、変化を求める勇気が大切なのです。谷川さんの決断のように、新しい自分に出会うために挑戦すること。そのためには、社会が涵養で多様性が保障されていなければなりません。今の社会は排除の理論も渦巻いています。それでも、舟の進路を決めるのは潮の流れでも風でもなく、帆の向きです。人生の航海で行き先を決めるのは、あなた方自身なのです。向かい風に立ち向かうときあれば、風を待つべきときもあるでしょう。自分の力が及ばぬ時は他の力を借りながら、それでも情熱だけは失わず、少しずついいから前へ進んでください。

結びになりますが、受け継いだ奇跡とも言うべき命を大切にしてください。先ほど紹介した分厚い詩集の中に大好きな詩があります。私はこれまで6度の卒業担任を経験していますが、卒業式後のホームルームではいつもこの詩を朗読して送り出しました。今日で7度目となりますが、谷川俊太郎さんの『朝』という詩を卒業の饞に贈ります。

（目を閉じて聞いてください）

また朝が来てぼくは生きていた／夜の間の夢をすっかり忘れてぼくは見た／柿の木の裸の枝が風にゆれ／首輪のない犬が日だまりに寝そべっているのを／百年前ぼくはここにいなかった／百年後ぼくはここにいないだろう／あたり前なところのようできて／地上はきっと思いがけない場所なんだ／いつだったか子宮の中で／ぼくは小さな小さな卵だった／それから小さな小さな魚になって／それから小さな小さな鳥になって／それからやっとぼくは人間になった／十ヶ月を何千億年もかかって生きて／そんなこともぼくら復習しなきゃ／今まで予習ばかりしすぎたから／今朝一滴の水のすきとおった冷たさが／ぼくに人間とは何かを教える／魚たちと鳥たちとそして／ぼくを殺すかもしれぬけものとする／その水をわかちあいたい（詩集『空に小鳥がいなくなった日』より）

令和7年3月1日

東北文教大学山形城北高等学校 校長 大沼 敏美